日本経済新聞 2008.12.5

審査委員長 国領 二郎氏

講評

地域間の連携 大きなうねりに

地域情報化が非常に深まり、広がりを見せていることが応募の中から分かった。今年はコンセプトの良さだけでなく、実績をどのくらい上げているかも見る、ややハードルの高い審査になった。

大賞のプロジェクトは、単なる一地域を越えて地域間で連携を進める本格的なものだ。地域情報化が大きなうねりになっていく期待を持たせる。

ほかの賞も医療、環境、女性の就労など非常に重要なテーマに解決策を提示し実績を上げている。行政の取り組みが行政の中だけに閉じず、官民が連携して大きな広がりになっている。大学にいる人間としては、大学や大学生が参加している取り組みが受賞したことも非常にうれしい。

今年の特徴としては農業、水産関係の応募の中に非常にいいものがあった。受賞は一つだったが、第一次産業の活性化に正面から取り組み、実績を上げている。地域活性化の大きな文脈の中で、一次産業の再生を通じ、日本社会の立ち直りを進めたいという思いが表れているのではないか。

世界経済は混乱している。こういうときこそ地域の力、地域の足腰が試される。受賞されなかった中にも、情熱を込めた取り組みがたくさんあったことを報告したい。

日経地域情報化大賞・記念シンポジウム特集

地域でSNS活用 人の輪広げ活性化

日本経済新聞社は十一月七日、日経ホール（東京・千代田）で「日経地域情報化大賞2008」の表彰式と記念シンポジウムを開いた。基調講演で東京都三鷹市の清原慶子市長はICT（情報通信技術）の街づくりへの活用の意義を訴えた。パネル討論では地域と人の輪をつなげるICTの可能性について実例を紹介した。司会は慶応義塾大学の飯盛義徳准教授。

＝敬称略

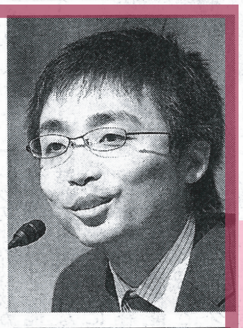
パネル討論 広がる活動

慶応義塾大学総合政策学部准教授
飯盛 義徳氏
（司会）

インフォミーム社長
和崎 宏氏

大賞 地域情報連携「OpenSNP」

和崎氏 地デジで口コミ情報



TRYWARP
代表理事
虎岩 雅明氏

インターネット協会賞 パソコン教え世代間交流

虎岩氏 大学生が住民と交流

司会 まず皆さんの活動概要について聞きたい。

和崎 二十一世紀の井戸端会議をつくることがそもそもの発想だった。ソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）は地域で元気な人たちをつなぐ非常に良いツール。キーパーソンのネットワークをつくればキーパーソンにつながる人々がくっついてくる。何かやろうと思えばすぐ人が集まり、企画ができる。

（SNSは）入会のハードルを高くしつつ、いろいろな機能をどんどん追加し、新しいことができるようにした。大切なのは現実の活動とうまくつながることだ。

現在はブロードバンド（高速大容量）がつながっている地上波デジタルのテレビを活用し、地域の口コミ情報を出力する試みを今年度と来年度で実用化する予定だ。カーナビゲーションでも地域の口コミ情報を流す。「いつでも、どこでも、誰でも」というインフラを基に「今だけ、ここだけ、あなただけ」という形で地域の信頼できる口コミ情報を届けていくことで仲間がどんどん増える。

高橋 二〇〇〇年、鳥取、島根両県の間にある中海の干拓事業中止が決まった。今後は観光資源になると考えたが、当時は水質が汚れていた。大学、行政、漁業関係者ら約五十人を集めて討論会を開き、十年で「泳げる中海」をつくるという決議を出した。それをテレビで放送した。テレビや住民が動き出せば、行政も次々に参加してくる。二年目からは体験クルージングとして中海に繰り出してもらった。地元でヨット、クルーザーを持っている人々を総動員し、陸上では中海の歴史がわかるような展示物を設けた。今年はボランティア百五十人、お客さん二百五十人が参加した。

次にアジア太平洋環境会議を米子市に誘致した。三年前には「アダプト・プログラム」と題し中海の周囲約八十四キロを百―二百メートルに区切って掃除するイベントを始めた。企業や非営利組織（NPO）、市民誰でも参加OK。これがどんどん広がった。

鳥取県議団も自民党、共産党でグループを組んで掃除している。今年六月の一斉清掃には鳥取、島根両県知事ら八千人が集まりゴミ掃除をした。現在は中海がきれいになった後、どう利活用するのかという「未来マップ」をつくろうと市民、行政と話し合っている。

虎岩 特定非営利活動法人（NPO法人）TRYWARPは〇四年一月、私が大学院生の時に立ち上げた。千葉大学の学生の八五%は地方出身で、みんな一人暮らし。地域に愛着を持ちながら暮らしてもらうため、アルバイトを通じ地域と触れ合うきっかけをつくろうと活動を始めた。

題して「パソコンプレックス解消大作戦」。大学生が、パソコンが苦手な人たちに教えることで知り合いが増える。パソコンを全く触ったことがなかった住民が半年でメールに写真を添付して送れるようになる。さらにその後のつながりをつくりたいと思い、SNSを立ち上げた。SNSを日ごろ見ていると最初に出会った関係がずっと続いているようだ。

関根 全員に共通しているのは地域や周りの人たちに対する愛が強いことだ。「いつでも、どこでも、誰でも」ではなく「今だけ、ここだけ、私だけ」というネットワークが二十一世紀のユビキタス情報社会のあり方ではないか。

ユビキタスという言葉を支える三つのUがある。まず「ユニバーサル」、次にユーザーの視点で考える「ユーザーオリエンテッド」、そして「ユニーク」。これには地域の活力なども含まれる。町や村には歴史や文化など磨けば光る宝がたくさんあり、もっと世の中に出していけるはずだ。

司会 様々な思いを持つ人々をつなげるノウハウを聞きたい。

和崎 舫（もやい）など伝統的日本型地域ネットワークはウェブ2・0やオープンソース、SNSなど今時の概念とよく似ている。テクノロジーに地域ネットワークの要素を組み込めば面白いプログラムができるのではないか。

私たちが開発したOpenSNPは地域の顔が見える場所でうまく使えるようにした。自分たちでつくったから自由に機能を追加したり変えたりできる。ユーザーが単なる利用者ではなく開発側に入ってくる。来春にはオープンソース化される予定だ。

コミュニケーションが徐々に増えていくというのが、地域SNSにとって最も良い状態だ。インターネットを使えば人は会わなくてすむといわれるが、それは違う。従来もよく会っていた人が、さらに頻繁に会うようになっている。「つなぐ」というよりも勝手にみんながつながり、仲良くなる場をつくることが地域活性化に直接つながると思う。

高橋 環境問題について何かをしたとき、最初は環境問題に熱心な人だけが集まる。そこに福祉やスポーツなどの団体をいかに集めるか、そういう「つなぎ」が輪を大きくする。次の回には逆に環境問題の人たちが文化の人たちをバックアップするという相互の助け合いが、町のチームワークを強くする。

私たちは病院や福祉、文化団体などを集めて「がいなネット」というネットワークをつくった。街で行方が分からなくなった高齢者がいれば「何時何分に米子の何とか町で行方不明の方が出たので探してください」と伝える。すると（ネットワークに参加する）何十台もの車が現場に向かう。あっという間に発見できたこともある。

地域間ネットワークも重要だ。米子市と周辺二市六町一村の人が交流するセンターを作り、米子市から観光バスに乗って田舎のおいしいものを食べに行く散策ツアーを始めた。地域の人たちが交流を起こすことで農村部と都市部の交流を図るのがねらいだ。

パネル討論 協働生まれる

関根氏 現実に会うこと大事

高橋氏 高齢者の知識生かす

虎岩 街で「こんにちは」と言える関係になること以上にエネルギーを使わないと最初に決めた。大学生には単なるアルバイトとしてやってもらう。親身にパソコンを教えていれば年配の人から「こんにちは」と声をかけてくる。それがうれしいのだ。

新聞の折り込みチラシなどを配り、全く関係なかった住民が教室に来るようにした。そうすれば大学生と住民、大学生同士でもお互いに知らなかった人が出会う。

この関係を基にSNSを立ち上げたが、意識しているポイントは二つ。一つは「出会い系」でなく「出会った系」。ネット上で人探しをするのでなく、実際に会った後、ネットの中で仲良くしようということだ。そして「情報の共有」よりも「気持ちの共有」。SNSの良いところは相手の気持ちを探れたり、相づちを打てたりすることだ。

ユーディット社長
関根 千佳氏
（コメンテーター）

関根 私は現実に出会うことが大事だと骨身に染みている。「ちょっと会おう」「メシ食おう」というのがとても大事だ。あちこちに出かけていっておいしいものを食べる、温泉に入る、誰かと出会う。それを別の誰かに伝えることは、これからのネットワーク市民の権利であり義務ではないかと思う。

地域をつなぐのは、困ったとき「助けて」と言える関係など人間の弱い部分かもしれない。SNSで一度助けてもらうことで次に誰かに聞かれたとき「こんな風にするといいと教えてもらった」という形でつながるかもしれない。弱さを出すことが強さに転換する時代ではないか。

司会 地域情報化の真骨頂は、地域の問題解決となる活動が生まれてくるところだ。今まで出会わなかった人たちのつながりから、活動を生み出すポイントは何か。

和崎 ネットワークが可視化され、人の連携が進んでいけば信頼関係がはぐくまれる。ただ、近すぎれば摩擦やトラブルも起こる。距離感を保ちつつも、誰かがボソッと言ったことが伝わり、それに誰かが共鳴し、様々なアクションをつくりだす。そこに多様さが生まれ、循環しながら協働が生まれる。

人が良い関係で共鳴したりするようになれば、後は勝手に動いていく。良いことであれば多くの人が自然に集まってくるのでそれを応援する。ネット内のにぎわいが、現実のにぎわいとリンクをしているのがSNSの面白いところだ。

高橋 地域に住む高齢者の知識を生かすために、どのような仕組みをつくっていくかが重要だ。地方は独居老人も多く、その人たちの悩みを地域で聞いていく。人的ネットワークがまず原点にあり、それを補うためにICTを使う組織をつくっていきたい。

豊かな町をどうつくるかについて地域住民と議論するなかで人的ネットワーク、ICTをどう使っていくのか。根底に愛や助け合い精神がなければ何をやってもつながらない。

虎岩 あえて言えば何もしないことが一番だ。みんなが自然に「ここはいいな」と思える状態にもっていかなければいけない。ただ、こちらが何もしないと「何かしろ」と言われる。そのときがチャンスで「では、これをやってみたら？」と言う。つながる努力は徹底的にするが、つながった後は誰かがやってくれる。

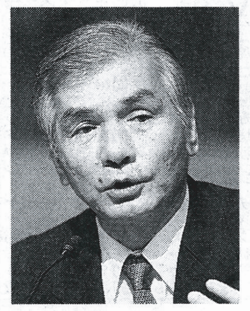
和崎 同感だ。「なぜやらないのか」とよく言われるが、私たちがやってしまえば仕組んでいる感じが出て、みんなに依頼心ができ面白くなくなると思う。できるだけ、何もしないように心がけて運営している。

高橋 何のためにつなぐかが明確なら、パワーは出てくる。私たちの目的のひとつは誇りのある町づくりをやりたいということで、例えば医師会と話しながら番組を共同でつくることもある。そうでなければ人手不足のなか、六チャンネル分の番組はつくれない。共感する人たちが目的を明確にしなければ、人はつながっても、ただそれだけで終わる。

関根 SNSは飲み屋の女将さんのようなもの。お客さん同士が仲良くなるのをいかに助けるかという役割だ。（メンバー間の）仲が悪いときには裏で「あの人、本当はいい人よ」ぐらい言ってあげてもいい。

ユビキタスとはそういうものではないか。ニーズがあるとき、そっと教えてくれるようなものであってほしい。ICTが進む方向性はSNSと近いところにあるのではないかと思う。

討論する（右から）ユーディット・関根、TRYWARP・虎岩、中海テレビ放送・高橋、インフォミーム・和崎の各氏。司会の慶応大の飯盛氏（11月7日、東京・大手町の日経ホール）



中海テレビ放送専務
高橋 孝之氏

CANフォーラム賞 中海再生プロジェクト

日経地域情報化大賞・記念シンポジウム特集